慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「新勅撰集」中の実朝の歌
Sub Title	Sanetomo's poems in the Shin-Chokusenshu
Author	松原, 多仁子(Matsubara, Taniko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1968
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.26, (1968. 11) ,p.1- 8
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00260001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「新勅撰集」中の実朝の歌

松原　多仁子

定家が「新勅撰集」にとっている実朝の二十五首の歌は、全て、建暦三年十二月成立の「定家本金槐集」にみられるもので、実朝の二十二歳までに詠まれた歌ということになるが、定家は実朝のいかなる傾向の歌を、自撰の「新勅撰集」にとっているのであろうか、また、定家は、歌人実朝をどのように評価していたのであろうか、これらの点について考察をすすめ、定家の〝実朝観〟ともいうべきものを把握してみたいと考えて、まず、定家が「新勅撰集」にとっている、実朝の二十五首の歌の傾向について考察を試みてみた。

定家が「新勅撰集」にとっている実朝の二十五首の歌の中には、

雁なきて寒きあさけのつゆ霜にやのの神山色づきにけり

風寒み夜の更けゆけばいもが島かたみの浦に千鳥鳴く也

古里の本荒の小萩いたづらにみる人なしに咲きかちる覧

などの、いわゆる万葉調の歌がみられる。その歌が万葉調の歌であるという場合には、一首全体の調べが万葉的である場合と、その

用語が万葉の用語である場合とがあると思われるが、「雁なきて寒きあさけのつゆ霜にやのの神山色づきにけり」の歌は、「万葉集」巻十の「妻ごもる矢野の神山つゆじもにほひそめたり散らまく惜しも」より影響をうけているものと思われる。「やのの神山」の句は「八代集」の歌の中には用例がなく、これはいわゆる万葉の語句ということができる。さらに実朝のこの一首は、調べも大らかでのびのびとしており、用語・調べの両方から、万葉調の歌ということができると思う。「風寒み夜の更けゆけばいもが島かたみの浦に千鳥鳴く也」の歌は、「万葉集」巻六の「ぬば玉の夜のふけ行けば楸生ふる清き河原に千鳥しばなく」が本歌となっていると考えられる。三・四句の「いもが島かたみの浦」の句が、やはり「八代集」の歌の中には用例がみられず、これは「万葉集」巻七の「藻刈舟沖こぎくらし妹が島形見の浦にたづ翔る見ゆ」によったものと思われる。この「風寒み」の歌なども、二句切の調べと共に、このように万葉の語句をみごとに歌いこんでいるという点からも、万葉調の一首ということができると思う。「古里の本荒の小萩いたづらにみる人なしに咲きかちる覧」の歌は、「万葉集」巻二の「高円の野べの秋萩いたづらに咲きかちるらむみる人なしに」の歌を本歌としている、本歌取の一首と考えることができる。本歌取という技法上から見た場合には、新古今時代の歌ということになるが、一首の調べが万葉的であり、歌風上からはこの歌なども、万葉調の一首と考えることができると思う。なお、「古里の本荒の小萩」の用例は、「新古今集」巻四の「古郷のもとあらの小萩咲きしより夜な夜な庭の月ぞうつろふ」にみられる。

これらの万葉調の歌に対して、定家が「新勅撰集」にとっている実朝の歌の中には、

ぬれて折る袖の月かげふけにけり籬の菊の花のうへの露

渡の原八重のしほ路にとぶ雁のつばさの浪に秋風ぞ吹く

思ひ出でて昔を忍ぶ袖の上にありしにあらぬ月ぞ宿れる

世にふればうき言のはの数毎にたえず涙の露ぞ置きける

のごとき、体言止の歌体といい、「つばさの浪」「うき言のは」「涙の露」などの語句といい、また、昔を忍ぶ涙にぬれた袖に月がうつるという趣向といい、全く時流の新古今調の歌と思われる歌も、一方には見られるのであり、分量からいえば先の万葉調の歌よりも、

実朝のこれらの新古今調の歌の方が、はるかに多く「新勅撰集」にとられているのである。「新勅撰集」中の実朝の二十五首の歌のうち、万葉調の歌と考えられるものは五首ほどであり、あとの約二十首は、新古今調の歌ということになるわけである。

また「新勅撰集」中の実朝の二十五首の歌の中には、

世のなかは常にもがもな渚こぐ蜑の小船の綱手かなしも

思出でて夜はすがらに音をぞなく有し昔の世々のふるごと

山はさけ海はあせなむ世なりとも君に二心わがあらめやも

のごとき、個性的な歌も数首みられる。「世のなかは常にもがもな渚こぐ蜑の小船の綱手かなしも」の歌の「常にもがもな」の句は、「万葉集」巻一の「河の上のゆつ磐群に草むさず常にもがもなとこ処女にて」によったものと思われ、また「綱手かなしも」の句は、「古今集」巻二十の「みちのくはいづくはあれど塩釜の浦こぐ舟の綱手かなしも」によっているものと思われる。しかし、このように万葉および古今の句を用いながら、内容的にみると、この「世のなかは常にもがもな」の歌のもつ思想性は、やはり実朝独自のものであり、実朝の個性的な歌の一つと思うのである。「思出でて夜はすがらに音をぞなく有し昔の世々のふるごと」の歌は、「金槐集」において「相州の土屋といふ所に、年九十にあまれる朽法師あり。おのづからきたる。昔がたりなどせしついでに、身のたちゐに堪へずなむなりぬることを、なくなく申して出でぬ。時に老といふことを人人に仰せてつかうまつらせしついでに詠み侍る歌」という詞書のある、五首連作中の一首である。「山はさけ海はあせなむ世なりとも君に二心わがあらめやも」の歌は、「金槐集」における詞書「太上天皇御書下預時歌」によっても知られるごとく、或る特殊な事情のもとに生まれた、実朝独自の歌である。「世のなかは常にもがもな」の歌、および「山はさけ海はあせなむ世なりとも」の歌などは、歌風上からは先の万葉調の歌の中に入れて考えることができるが、これらの歌には、単に万葉調の歌というだけには止まらないものがあると考えられる。すなわち、実朝の人生観なり、将軍としての立場なりが、これらの歌にはよくあらわれていると思うのである。

それから更に、和歌の技巧の面から見た場合に、定家が「新勅撰集」にとっている実朝の二十五首の歌の中、本歌取の歌と認められ

るものが八首ある。実朝の本歌取の歌については、以前に考察を試みたことがあるが（「芸文研究」第二十一号「実朝の本歌取の歌」）「貞享本金槐集」の七一六首の歌のうち、本歌取の歌と認められるものが一九五首（27％）あり、そのうち、本歌の語句を二句と三・四字以内の範囲でとっているものが一六三首（84％）、二句と三・四字以内で本歌の語句をとり、かつ、四季の歌を恋・雑の歌に、恋・雑の歌を四季の歌によみかえているものが七二首（37％）みられた。いま「新勅撰集」中の実朝の本歌取の歌をみていくと、

新勅撰集中の実朝の本歌取の歌

○玉藻刈るゐでの志がらみ春かけて咲くや川瀬の山吹の花（秋）
　たまも刈る井手のしがらみうすみかも恋の淀めるわが心かも（万・恋）

○道のべの小野の夕霧立ちかへりみてこそ行かめ秋萩の花（秋）
　春ふかみ井手の川浪たちかへりみてこそ行かめ山吹の花（拾・春）

○渡の原八重のしほ路にとぶ雁のつばさの浪に秋風ぞ吹く（秋）
　はるかなる常世はなれて鳴く雁の雲の衣に秋風ぞふく（月清集・秋）

○雁なきて寒きあさけのつゆ霜にやのの神山色づきにけり（秋）
　妻ごもる矢野の神山つゆ霜ににほひそめたり散りまく惜しも（万・秋）

○風寒み夜の更けゆけばいもが島かたみの浦に千鳥鳴く也（秋）
　ぬば玉の夜の更け行けば楸生ふる清き河原に千鳥しばなく（万・秋）

○古里の本荒の小萩いたづらにみる人なしに咲きかちる覧（秋）
　高円の野べの秋萩いたづらに咲きかちるらむみる人なしに（万・挽歌）

○我恋はあはでふる野の小笹原いく夜迄とか霜の置くらむ（恋）
　いそのかみふる野の小ささ霜をへて一夜ばかりに残る年かな（新古・冬）

○春きては花とかみえむおのづから朽木の杣にふれる白雪（雑）

春きては花ともみよと片岡の松の上葉に淡ゆきぞふる（新古・春）

「玉藻刈るゐでの志がらみ春かけて咲くや川瀬の山吹の花」の歌は、「万葉集」巻十一の「たまも刈る井手のしがらみうすみかも恋の淀めるわが心かも」の恋歌を本歌とする本歌取の歌であり、本歌の「万葉集」の句を二句とり、また「恋歌」を「秋歌」によみかえている。「道のべの小野の夕霧立ちかへりみてこそ行かめ秋萩の花」の歌は、「拾遺集」巻一の「春ふかみ井手の川浪たちかへりみてこそ行かめ山吹の花」を本歌として、本歌の語句を二句と三字とっている。また、本歌の「春歌」を「秋歌」によみかえている。「渡の原八重のしほ路にとぶ雁のつばさの浪に秋風ぞ吹く」の歌は、「月清集」の「はるかなる常世はなれて鳴く雁の雲の衣に秋風ぞふく」を本歌としていると考えられる。本歌の語句を一句と四字とっているのみであるが、一首の内容・調子ともに本歌とよく似ている。「雁なきて寒きあさけのつゆ霜にやのの神山色づきにけり」の歌は、「万葉集」巻十の「妻ごもる矢野の神山つゆじもににほひそめたり散らまく惜しも」の歌を本歌としていると考えられ、本歌の「万葉集」の句を二句とっている。「風寒み夜の更けゆけばいもが島かたみの浦に千鳥鳴く也」の歌は、「万葉集」巻六の「ぬば玉の夜のふけ行けば楸生ふる清き河原に千鳥しばなく」を本歌としていて、本歌の語句を一句と六字ほどとっているのみであるが、一首の調子が本歌と似ている。「古里の本荒の小萩いたづらにみる人なしに咲きかちる覧」の歌は、「万葉集」巻二の「高円の野べの秋萩いたづらに咲きかちるらむみる人なしに」の歌を本歌としていると考えることができる。「万葉集」のこの歌は「挽歌」であり、それを「秋歌」によみかえているが、本歌の句を三句と二字とっており、この点においてはいささか取り過ぎということになるかと思う。「我恋はあはでふる野の小笹原いく夜迄とか霜の置くらむ」の歌は、「新古今集」巻六の「いそのかみふる野の小ささ霜をへて一夜ばかりに残る年かな」を本歌としている本歌取の歌であり、本歌の語句を一句と三字だけとっている。さらに本歌の「冬歌」を「恋歌」によみかえることもしている。「春きては花とかみえむおのづから朽木の杣にふれる白雪」の歌は、「新古今集」巻一の「春きては花ともみよと片岡の松の上葉に淡ゆきぞふる」を本歌として、本歌の語句を二句ほどとっている。また「春の歌」を「雑の歌」によみかえることもしている。定家は、本歌取に関して、本歌の句を三句とることは取りすぎで

あるとし、二句と三・四字まで本歌の語句をとることを認め、また、四季の歌を恋・雑の歌によみかえ、恋・雑の歌は四季の歌によみかえることなどについて言っているが、このように「新勅撰集」に定家がとっている実朝の八首の本歌取の歌は、そのだいたいが定家のいう本歌取の技法にある程度かなった歌であるということができる。

以上みてきたように、定家は「新勅撰集」に実朝の万葉調の歌、時流の新古今調の歌、両方の傾向の歌を共にとり、更に「世のなかは常にもがもな」や「山はさけ海はあせなむ世なりとも」などの、実朝独自の歌もとっている。また、技巧の面からみた、実朝の本歌取の歌をも八首、定家は「新勅撰集」にとっている。では、実朝の歌の師匠であった定家は、実朝を歌人としてどのように評価し、また指導していたのであろうか。「新勅撰集」における主なる歌人とその入集状況とについてみてみると、次の表のごとくである。

新勅撰集の主なる歌人	家隆	良経	俊成	公経	慈円	道家	実朝	雅経	相模	実氏	定家
入集歌数	四三首	三六首	三四首	三〇首	二八首	二五首	二五首	二〇首	一八首	一七首	一五首

これによると、実朝の二十五首という入集歌数は六番目に多いということになり、相当重んじられた待遇であるということができる。ただし、「新勅撰集」には武家の歌が多く採られたため、「宇治川集」と呼ばれたりしたほどであるから、その点を考慮する必要があるかと思うが、定家が実朝を認めていたことは確かであろうと思う。さらに「毎月抄」にみられる定家の作歌指導の方針ともいうべき次の事柄に注目すると、「毎月抄」には「さきにしるし申し候ひし十躰をば、人の趣を見てさづくべきにて候。器量も器ならぬもうけたる其躰侍るべし。或いは幽玄の躰をうけたらん人に、鬼拉の様をよめとをしへ、又長高様を得たる輩に濃躰をよめとをしへん事は、何かよかるべき」。「我このむやう、うけたる姿なればとて、此躰をよめと得ざらん人にをしへ候はん事、返々道の魔障にて候べし。その人のよめらん歌を能々見したためて後に、風躰をさづくべきにて候」。「ただわがよむやうをまなべとのみをしふる事、無下の道しらぬにて侍るべし。もしわれにこえて物をもたかく案じ、すぐれたる姿を天骨とよむ人あらんに、かやうに提撕せばなにかよろしく侍るべき。」とあり、これによると、人にはそれぞれ「うけたる其躰」があるはずであるから、その人がどのような歌をよむ人であるかとい

うことを、よく知った上で、その人にふさわしい風躰をさずけ、指導すべきである。というのが、定家の考えであり、指導の方針であったと考えられる。すなわち、定家は、ひとりひとりの歌人の個性を尊重する態度で指導にのぞんでいたと思われるのである。したがってこれらのことから考えて、定家は、実朝の歌の指導をする際にも、自己の歌風を実朝に強いるようなことはなかったであろうと思われる。実朝が万葉風の歌をよむようになったのは、もともと、万葉の歌に共鳴するような大らかな力強いところが、その性格の中にあったものと思われ、それに加えて、鎌倉という素朴な気候風土、三代将軍という地位環境などが作用したのではないかと考えられるが、定家は、実朝が「万葉ぶり」を「うけたる躰」として身につけた歌人であることを認め、その個性を尊重し、実朝が万葉風の歌をよむことを承認していたのではないかと思われる。万葉の歌に対する定家の見解は、同じく「毎月抄」の「万葉はげに代もあがり、人の心もさえて、今の世にまなぶともさらにおよぶべからず。殊に初心の時、をのづから古体をよむ事あるべからず。但、稽古年かさなり風骨よみ定まる後は、又万葉のやうを存ぜざらん好士は、無下の事とぞおぼえ侍る。」によって、うかがい知ることが出来るのであるが、「吾妻鏡」にも記録のあるごとく、建暦三年実朝二十二歳の秋、定家は「万葉集」を実朝に献じているのである。「初心の時は万葉の体をよむべからず」といっている定家が、このように自から実朝に「万葉集」を贈っているということは、実朝がすでにある程度の歌よみであることを定家は認めていたからにほかならないと思われ、また、実朝が「万葉ぶり」を「うけたる躰」として身につけている歌人であるということを認めていた故と思われる。このように定家は、実朝が万葉風の歌をよむことを承認していたと考えられるのであるが、しかしなんといっても当時は新古今歌風の全盛期であり、定家は新古今時代の第一人者であった。その定家の指導のもとに、実朝は一心に新古今調の歌について学んだであろうと思われるのである。すなわち、実朝がはじめて定家に合点を受けたと思われる承元三年（実朝十八歳）の時から、「定家本金槐集」の成立した建暦三年（実朝二十二歳）までの「吾妻鏡」の記録をみてみると「承元三年八月十三日、知親京都より帰参し、定家の合点を加えたる歌を返進し、又詠歌口伝（近代秀歌）一巻を献ず。六義風体の事を内々尋ねたるによる。」「建暦二年九月二日、筑後前司源頼時京都より下向し、定家の消息並に和歌文書等を今日持参す。」「建暦三年八月十七日、藤原定家、二条雅経に付し、先日実朝の尋ねし和歌文書を献ず。殊の外感興あり。」「建暦三年十一月二十三日、

去七日藤原定家の献じたる相伝の私本万葉集一部到着す。賞翫措かず、重宝何物か之に過ぎんと云ふ。」という工合に、実朝の求めに応じて、定家が「近代秀歌」をはじめ「和歌文書」等を実朝に贈った記録がいくつか残っているし、また「金槐集」の歌の中に、時流の新古今調の歌があれほどたくさん見られるという点からも、実朝が定家の指導のもとに、本歌取の技法をはじめ、当時の歌風の吸収につとめた様子が伺われるのである。

以上、定家が「新勅撰集」にとっている実朝の二十五首の歌について考察し、また、定家の歌論書にみる作歌指導の方針ともいうべき事柄について考察することによって、定家の〝実朝観〟ともいうべきものの把握につとめてきたが、定家は、ひとりひとりの歌人の個性を尊重する方針で指導にのぞんでいたということ、さらに、初心のうちは万葉風の歌をよむことをいましめていながら、実朝に「万葉集」を贈っているということ、自撰の「新勅撰集」に実朝の歌を二十五首とり、万葉調の歌をもとっているということなどの点から、定家は、実朝がすでに初心の歌よみではなく、ある程度の域に達した歌人であり、「うけたる躰」として「万葉ぶり」を身につけた歌人であるということを認め、時流の新古今歌風の指導に当る一方では、実朝が万葉風の歌をよむことを承認していたと思われるのである。

（本稿は、和歌文学会第十二回大会において研究発表したものである。）